

鹿島平和研究所 外交研究会

イランとシリアをつなぐ 「軸」と「動輪」

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
中東研究センター
田中 浩一郎

2014年3月18日

本論の構成

- イラン・シリア関係
 - 伝統的な二国間関係の姿
 - アフマディネジャード期の変質
 - 「アラブの春」の影響
- 混迷を深めるシリア情勢
 - 内戦の現状把握
 - アサド体制存続の方程式
 - 反体制派の内紛
- 「軸」と「動輪」を構成するもの

イランと「アラブの春」

- イランによる評価の変遷
 - 親米(スンナ派)アラブ政権に対する民衆の叛旗 👍
 - イスラームの覚醒 👍
 - 恣意的な軍事介入を行う、西側の偽善 👎
 - 外国の干渉とテロリストへの支援を通じた、政権転覆の陰謀 👎
- イラン自身は、2011年2月14日の「危機」を回避
 - 2009年夏以来の抑圧がもたらした学習効果
 - 「グリーン・ムーブメント」と民衆のかい離が深刻

イランとシリアを結ぶ実利的要素

- 戦略的同盟国としての関係
 - アラブ世界における盟友としての存在に価値
 - イラン・イラク戦争時の側面支援と兵器移転
 - アフマディネジャード時代の反米同盟深化
 - レバノン(ヒズブッラー)への回廊提供
 - 各パレスチナ組織との接触地点
 - PFLP-GC
 - ハマース
 - シーア派の巡礼地(ゼイナブ廟)を擁する
- ⇒ だが、国民レベルでの親近感は薄い
- ロウハーニ師の大統領選出時の記者会見で表出

対シリア外交政策の移ろい

- 80年代より、時の最高指導者が対応する相手国
 - Akhtari 大使(1986~97年、2005~07年)
 - 例外は、ハータミ大統領時代(1997~2005年)
- 湾岸戦争に際して表出したわだかまり
 - 中立を志向したイラン
 - シリアは、エジプトと GCC とともに、連合国側で「参戦」
 - 以来、米国との関係改善を進めたシリアに不満
- 2011年の内戦勃発後の変化
 - IRGC の Qods 部隊ソレイマーニ司令官が対応を主張
 - Moussavi 駐シリア大使(上記 Akhtari 大使の後任)が突然の辞任

アサド政権支援の痕跡

- トルコによるイラン航空機の臨検（2011年3月）
 - 領空通過中の貨物機に着陸を命じる
- トルコがシリア向けトラック移送を阻止（同年8月）
- イラク領空を使用した空輸の噂
- 安保理決議 1929 専門家パネル報告書
 - 報告事例の多くが、イランからシリア向けと考えられる兵器供与
 - これはイランからの武器移転禁止を定めた決議 1737 に対する違反行為
 - 世間の期待は、イランによる核開発関連機材や技術の密輸事例の暴露と調査にあった

生き残りをかけた、アサド大統領の統治

- 政権と体制の正統性の確認
 - 一義的には、治安維持と安全保障を担える体制
 - 一方、警察国家体制への反発が不満の糧に
 - もうひとつは、「改革者」としてのアサドの顔
 - 「改革」の断行
 - 反体制派の出鼻をくじく、非常事態宣言の解除など
 - 人材の登用による、権力機構の維持
 - テロや離反で空席となった、ポストの穴埋め
 - 「総動員」態勢の確立
 - 自発的な動機をベースとした、体制支持基盤の強化
- ⇒ いま、治安維持と改革が怪しく、任期満了が間近

シリアとリビアの相違点

シリア

- 強力な軍を構築
- 軍の「私兵化」が進む
- バアス党による、国家行政機構の整備
- 大きい「インナーサークル」
- 資源的な余裕は少ない
- 密告社会の建設
- 欧米との関係改善は後退
- ロシア(ソ連)と緊密な関係
- イラクとレバノンに隣接
- 欧米による武力行使を阻止

リビア(カダフィ政権)

- 軍事組織を弱体化
- 「私兵」に依存
- ジャマーヒーリーヤ体制の構築
- 小さな「インナーサークル」
- 人口が少なく、資源が豊富
- 密告社会の建設
- 欧米といったんは雪解け
- ロシア(ソ連)と緊密な関係
- サハラ砂漠を擁する
- 米欧による武力行使発生

シリア内戦の現況

- ひところの劣勢を挽回したシリア軍
 - 転換点となった、クサイル攻防戦での勝利
 - ヒズブッラー戦闘員の大規模参戦
- 化学兵器使用をめぐる「闇」
 - 必然性が理解不能
 - 化学兵器廃棄は、各国の懸念払しょくに資する
- 内戦そのものに対する国際社会の関心低下
 - 化学兵器の早期廃棄が中心に
 - ウクライナ情勢の急変による埋没の可能性
 - その間に、シリア軍が失地回復を進める
 - ヒズブッラーの支援を受け、ダマスカス北方のヤブルードを奪還

シリア内戦の当事者たち

アサド政権

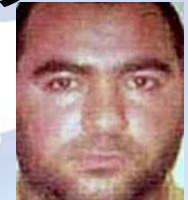
- シリア国軍
- 治安組織(ムハーバラート)
- 非公然組織シャツビーハ
- 人民諸委員会(自警団)
- 国民防衛軍団(義勇軍)
- ヒズブッラー
- イラク人シーア派民兵
- 軍事顧問団
 - ロシア
 - イラン

反体制派武装勢力

- 自由シリア軍
 - 一時、米欧の「期待の星」
 - イドリース司令官更迭で混乱
- イスラーム戦線
 - 6(7)組織による集合体
- ヌスラ戦線
 - AQが正統な支部と認知
- ISIS(ISIL)
 - イラクからシリア東部に浸透
- YPG
 - クルド人組織で他と距離感

シリアをめぐる、ジハーディストの内紛

- 「イラクのアル・カーイダ」(ISI)が、シリアの「ヌスラ戦線」(Nusra Front)と「統合」(2013年4月)
 - ISIのバグダーディ司令官の声明発表
 - 新名称「イラクとシリア(レバント)のアル・カーイダ」(ISIS or ISIL)
- ヌスラ戦線が発表に反発
 - ジャウラーニ司令官がバグダーディ声明を否定
 - アル・カーイダ本体のザワーヒリ指導者への忠誠を表明
- ザワーヒリ指導者が介入(同年5月)
 - ISIS(ISIL)の「解消」を指示
 - 「イラク国内での活動を継続せよ」
 - 「ヌスラ戦線は、AQ本体の直属組織」



イランにとってのシリア内戦とアサド政権

関与継続論

- 唯一の反米アラブ同盟国
- レバノンのヒズブッラーへのアクセス提供
- 中東和平問題への間接的発言権の確保
- 対イスラエル圧力行使の重要なアクター
- 宗派的少数派への支援
- サウジアラビアの勢力圏拡大阻止

慎重論・非関与論

- 経済制裁下での財政負担の重さ
- 国民感情への配慮
- ヒズブッラーの消耗とモラル低下を誘発
- 化学兵器使用疑惑や戦争犯罪行為等、イランの「価値」に背反
- 孤立の一因
- 域内対立の最大要因

⇒ 放置できない、ジハードイスト問題とその対応

イランとシリアの結束を量る

- 国際秩序：米欧支配への抵抗
 - － それぞれが採用する、特定の政策への反応として
 - たとえば、中東和平に対する諾否
 - － 一方、陰謀論的解釈に基づく対応でもある
- 地域覇権：サウジアラビアやトルコとの対抗
 - － 特定のイシューの影響を受けやすい
 - － 現在は、「アラブの春」へのスタンスで弁別が進む
- ローカル：スンナ派ジハードイストの撲滅
 - － 喫緊の脅威としての共通認識
 - － 対外宣伝のうえでも一致

主要参考文献(シリア関係)

- 青山弘之

「紛争下のシリアにおける政治構造の若干の変容(試論)－権力の『二重構造』持続に向けた抜本的制度改革－」『国際情勢紀要』国際情勢研究所、No.84、2014.2。

- 小副川琢

「シリア・レバノン情勢の現状と地域的影響」、日本エネルギー経済研究所 第8回情勢分析報告会、2014年3月6日。

- Taku Osoegawa

“Syria and Lebanon: International Relations and Diplomacy in the Middle East,” I.B.Tauris & Co. Ltd., London, 2013.